落ちてる手袋を見ると

林羽夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
落ちてる手袋を見ると

【Ｎコード】
Ｎ６９９６Ｚ

【作者名】
林羽夢

【あらすじ】
道端に落ちていた手袋の裏に隠された、壮大なラブストーリー…を妄想してみた。そんなお話。

はじめに（前書き）

はじめまして。林羽夢と申します。初投稿です。
皆さんは、道端で手袋を見て何か考えますか？何にも考えないという人、多いんじゃないでしょうか。
これは、そんな皆さんに送る、壮大な妄想で構成された物語です。
私の分身であり、話進行役のハムリンに話してもらいました。

頑張って更新していきます！

はじめに

皆さん、はじめまして。私は、話進行役のハムリンと申します。さて、最近寒くなってきて、外に出る際には防寒具が欠かせませんね。

そういえば、防寒具で思い出したのですが、昨日道端で手袋を見ましたよ。そう、落とし物です。私は元々下を見る人で、昨日も斜め右下を見つめながら歩いていました。そしたら、ガードレールの足元にポツンと一つ落ちている、それを見つけたのです。

それは大人用の右手袋でした。どんよりした冬の空気に対抗するような鮮やかな桃色からして、女物でしょうね。それにしても、あれは落とし物にしては綺麗でした。持って帰って使っても良いくらいでしたよ。あ、もちろん拾ってませんがね。

右手だけでは使い物にならないでしょう。

しかし、なぜ右手だけ落としたのでしょうかね。ポケットに右だけ入れておいて、ふとした瞬間に落としたのでしょうか。それとも、子供が親の手袋で悪戯でしょうか。いろいろな意見が飛び交いそうですが、ここでは私が考えた説をご紹介しましょう。

<妄想開始>二ヶ月前の公園で

それは、早くも日が沈み始めた夕方のこと。一人の女が、自慢の腰まで伸びた黒髪を秋風に遊ばせながら、公園のベンチに座っていました。カサカサと、枝から追い出された枯れ葉が音をたてています。

彼女は今、もうすぐ付き合って二年になる男を待っている最中でした。左腕に着けた腕時計は、いつ見ても数秒ずつしか動きません。公園の入り口を見つめても、車しか通りません。女はだんだん不安になってきました。

（このまま来なかったらどうしよう、事故にでもあったんじゃ。いや、急遽来れなくなったのかもしれない。だとしたら、メールが来ているはず。）

女はおもむろに鞄の中から携帯電話を取り出し、開きました。メールが一件入っています。急いで確認すると、携帯の契約会社からの料金通知メールでした。女はイラついたようにクリアボタンを押し、待受画面に戻しました。

待受画面には、自分と彼氏の写真が輝いています。これは丁度、去年の今日に撮った写真でした。彼は写真嫌いな人でしたが、その日は彼女の誕生日ということで、特別にツーショットを許したのです。　女はその写真をまじまじと眺めました。一年前の自分は、大好きな桃色のジャケットを着て、黒髪を束ねて頭の上でまとめています。その顔は、はち切れそうなくらい幸せそうでした。一方男は、恥ずかしそうに苦笑いしながら、彼女を左手で抱き寄せています。肌寒い秋に感じた彼のぬくもりは、一生忘れないでしょう。

しばらくして、待受画面を見飽きた女は、携帯から目を離して公

園の入り口を見ました。しかし、写真の中で苦笑するその人は現れません。腕時計を見ると、待ち合わせの時間の遥か三十分後を示していました。

ついに女の不安は最高潮にまで達しました。そこで、手に持った携帯のボタンを慣れた手つきで押し、怒りと不安を込めたメールを最愛の彼に送ったのでした。

意外なことに、メールはすぐに返ってきました。といっても、送ってから十分経った後なのですが。きっと返ってこないと思っていた女からして、この十分は早い方に入るのです。

メール文はとても短いものでした。『待たせてごめん、もうすぐ着くよ。』

絵文字のない質素なメールでしたが、寛大なこの女は、ただ彼が無事でいたことに満足しました。しかし満足すると同時に、少し不愉快になったことは間違いありません。

こんな大遅刻、何か深いわけがあっても良さそうなものですが、彼女には全く思い当たりがないのですから。

それから数分経たずに、彼がいつものぶっきらぼうをぶら下げて公園に入ってきました。

「ごめん、水奈（みな）。待ったよな。」

すまなそうにそう言う彼は、黒いジャンパーにジーパンといった楽な格好をしています。どうやら、着替えに手間取ったのではないようです。

「遅いよ文夜（ふみや）。遅刻しすぎ。心配しちゃったよ。」

決して軽率な様子はない彼女が、文夜の目に映りました。

「ごめん、本当にごめん。」

いくら謝ってみても、彼女、水奈は応じてくれません。

「私がいくら優しくてもね、三十分以上の遅刻は許せないよ。なんでこんなに遅くなったの。」

静かに怒りを露にする水奈は、困惑する文夜の顔から目線を落としました。その時、文夜の手に小さな袋が握られていることに気づいたのです。

淡いピンク色の包装紙が、手のひらより二回りくらい大きく綺麗にまとまって、赤いリボンを付けています。文夜はそれを、大事そうに握っているのでした。

桃色のプレゼント

「ごめん水奈。これにはわけがあって…。」

目線を落とす彼女に、文夜は何度も謝り続けます。例の包装紙は、そんな中でもやはり、大事そうに握られています。

水奈はその包装紙の中身が気になって仕方がありません。許してもいいから、その中身を知りたくなりました。

「わかった、いいよ文夜。そのわけを説明して。」

このとき水奈は、一つの期待を抱いていましたが、彼の答えはそれに的中するものでした。

彼は、手に持ったものを胸の前に出して、照れ臭そうに言いました。

「あの、今日は水奈の誕生日だろ？　去年は写真だったけど、今年はやっぱりもう少し高価なものがいいと思って…。」

「そんな、いいのに。」

慌ただしく手をひらつかせる水奈に、文夜も空いている右手を振りました。

「いや、だって、去年のお前からの誕生日プレゼント、コートだったじゃないか。」

「あれは…まあ、高かったけど、別に見返りを望んでいる訳じゃないし…。」

口を尖らせる水奈の目の前に、文夜は左手に持った包装紙を差し出しました。問答無用、買ったんだから貰え。ということでしょう。
彼からのプレゼントで喜ばないほど、水奈は冷淡な女ではありませんでした。だから、口では遠慮をぶつぶつ言いながらも、手はそれを受け取りました。

「実はそれ、今日買ったんだ。なかなか良いのが見つからなくてさ。」

ベンチに座って包み紙を嬉しそうに抱える彼女を見下ろしながら、文夜は『わけ』を説明しだしました。

文夜の話を簡単にまとめると、誕生日プレゼントを選んでいたから遅刻した。とのことでした。

「遅くなるなら連絡くれればいいのに。」

なら心配しなかったのに。と再び口を尖らす彼女でしたが、内心では喜んでいました。何せ女心をわかってくれなさそうな仏頂面からの、突然のプレゼントなのですから。いくら遅刻したといえ、不器用な彼が頑張った証というなら水奈には許せるのでした。
しかし表面の水奈しか見えていない文夜は、彼女の言葉に真剣に答えました。少し、その日焼けた頬を紅潮させながら。

「それは、あの、サプライズみたいにしたかったから。」

それを聞いた水奈は、急に可笑しくなりました。プレゼントを抱えながらフフフと笑っていると、文夜の頬はますます赤くなりました。元々こういった事が苦手な彼は、プレゼントを買う時点からすでに恥ずかしさをこらえていたのです。しかも、せっかくの誕生日

だからと頑張った結果、こうして彼女に笑われてしまったのですから、紅潮しても仕方がありません。

「なんで笑うんだよ。」

「フフッ、だってさ、文夜がこんなこと考えるとは思わなかったんだもん。」

今日はじめてニコニコ笑う水奈は、もう遅刻のことを忘れていました。

文夜も、そんな彼女を見てホッと胸を撫で下ろし、その隣に腰を落ち着かせるのでした。

「ねえ文夜。開けてもいいかなあ。」

ひとしきり笑ってすっかり機嫌が直った水奈は、ワクワクしながら文夜を見ました。頬の色が戻っている文夜はただ、コクリとうなずきました。

水奈はそれを見ると、すぐに包みに手をかけました。丁寧に、丁寧に、決して破いてはいけません。包装紙は水奈の手によって、綺麗にゆっくりと開かれていきました。文夜も、その様子を横から見守っています。気に入ってくれるかが問題なのです。

やがて、包み紙の中から露になった物を見て、水奈の顔が輝きました。それは、水奈の大好きな桃色の手袋でした。

「バイトの時給では、これが精一杯だったんだよ。」

手にはめてみてぴったり合うことを確認している彼女に、文夜はすまなそうに言いました。

現在二人は大学生で、文夜の方が一つ上です。そんな彼の収入源は、コンビニのバイトの少ない時給でした。

「十分だよ。ありがとう！」

彼のそんな事情を知る彼女は、嘘偽りない笑顔を彼に送り返すのでした。

そして冬のこと

それから二ヶ月が経ちました。今度は文夜の誕生日です。水奈はあの桃色の手袋を右手だけにして、通りを歩いていました。

水奈の頭の中には、二ヶ月前の公園で交わされた会話が蘇っています。

「あ、そうだ。ねえねえ文夜。この手袋、ペアにしようよ。」

無邪気に笑い、水奈はそう提案しました。文夜は困惑する表情で問いかけます。

「え、ペアって？」

一つしかないのに。と付け加えようとする文夜にニコリと笑い、水奈は左の手袋をはずしました。

「こうすればいいでしょ。分けられるものは分けようよ。」

「そんなことしなくていいだろ。俺からのプレゼントなんだし。」

受け取ろうとしない文夜に、水奈はまたまた口を尖らせました。

「私はペアがいいの。せっかくの嬉しいプレゼントなんだもん。」

ブーブー言う彼女に、文夜は従う外なかったのでしょう。はいはいとうなずきながら、右手でそれを受けとると、左手にはめてくれました。

毛糸の手袋は、文夜の手のサイズにしっくりとおさまりました。

「うわあ、似合ってる似合ってる！」

無愛想な彼と可愛げな桃色が対照的で、思わず水奈はコロコロと笑い出してしまいました。文夜はムッとして手袋を外すと、ジャンパーのポケットに突っ込みました。

水奈は涙を指先で拭い、軽く文夜に謝りました。

そして、またひとつ提案をしたのです。

「ねえねえ、文夜の誕生日に、この手袋して来ようよ。」

文夜は少しめんどくさそうな顔をしました。

「えー、ピンク色の手袋して歩くの嫌だ。しかも片方だけ。」

「ふふっ、そっか、そうだよね。」

水奈は一人で納得したように腕組みをし、うなずいてみせました。さっきの対照的な光景を思い出しながら、です。

「じゃあ、とりあえず持ってきてよ。」

どうしてもペアルックを成立させたい水奈は、譲れるほど譲ってそうお願いしました。

文夜も、それならいいと了解してくれたのでした。

ここまで思い出したところで、あの公園に着きました。

今日はさすがに文夜の方が先に来ていて、かつて水奈が座ってい

たベンチに腰を下ろしています。
その文夜の服装を見て、水奈は思わず声をあげてしまいました。自分が去年の今日にあげたコートを、しっかりと身に付けているのです。そしてその夜のような暗い生地の隙間から、チラリと桃色が確認できました。
なんと彼は、わがままな彼女の要望を受け入れただけでなく、プラスアルファをやってくれていたのです。「おはよう水奈。ほら、ちゃんと手袋持ってきたぞ。」
幸い、水奈の声は小さくて彼には聞こえていませんでした。文夜はポケットの端からチラリと見える桃色をつまんでみせました。コートについては、着て来るのが当然とでも言いたげです。
水奈は北風に黒髪をすくわれながら、文夜の元へ歩みを進めました。
「おはよ。ありがとう文夜。…コートも着てくれたんだね。」
「ん、ああ、まあ。」
水奈の指摘に、文夜は身のない返事をすると、その黒い瞳を細めるのでした。水奈の目には、そんな文夜は照れているように映りました。
しかし、実際はもっと違う意味を持っていたことを、彼女はまもなく知ることになるのです。

そして落ちる手袋

しばらく二人は、公園のベンチで仲良く話をしていました。

「でねー、かんなちゃんったら、また次の日もボールペン貸してって、手合わせて来たんだよー。」

「へー。上無さん、本当に忘れ物癖ひどいな。」

上無かんなとは、二人の友人で、水奈と同い年です。この仲の良いカップリングの成立の基礎を作ったのもこの人で、同じバイトの文夜を、大学の友人である水奈に紹介したのでした。

「でも、かんなちゃんがいなかったら、文夜みたいにいい人とは会えなかったよ。」

自分の素直な気持ちを伝えるのに恥ずかしさを覚えない水奈は、笑顔でさらりと言ってのけました。

一方、恥ずかしがりの文夜は、ふうんと適当な相づちを打って黙り込みました。その頬はやはり赤みが差していましたが、彼の顔には嬉しさはなく、むしろ悲しさがあるように思われました。

その曇った表情は、さすがに水奈でも気にかかりました。しかし、もしかしたら自分の今の発言に困っているのかも。と考えて、あえて触れることを避けました。

そしてその代わり、文夜の横から腰を浮かせました。

「そろそろ寒くなってきたね。どこか温かいとこに行かない？」

そう言って文夜を見下ろすと、文夜はしんみりとした表情を慌て

たように崩し、返事の代わりに立ち上がりました。

二人は仲良く通りを歩いています。
片方だけの手袋を一人だけするのはやはり抵抗があるので、水奈も右手袋をポケットの中にしまっています。
向かう先はレストランです。携帯の時計を見るともう十二時半くらいだったので、とりあえず昼食をとるのです。

「よく二時間もあの公園で話していられたな、俺たち。」

文夜がおもむろに口を開けました。

「そうだね。文夜といると時間の流れが早いなあ。」

携帯を開いて時刻を確認しながら、水奈はそう答えました。
文夜は、自分より背が五センチ低い彼女を見下ろして、小さくため息を漏らしました。文夜には大事な話がありました。しかし、自分と一緒にいて幸せそうにする彼女に、なかなか言い出せずにいるのでした。

それから何時間が経ったのでしょうか。夕日が沈む頃二人はまた、通りを歩いていました。しかし今度はレストランとは反対方向、駅の方向です。
文夜は、新しい白色のマフラーを巻いていました。レストランで彼女から貰った誕生日プレゼントです。
そして、未だに大事な話を言えずにいました。これ以上引き延ばしてしまえば、言う機会はもう二度と手に入らなくなってしまうのです。

「うう…やっぱり寒いね。片方だけど手袋しようかなあ。」

右隣では彼女が白い息を吐きながら、ポケットから桃色の手袋を取り出しているところでした。

文夜は急に、周りに人がいないことを確認すると、立ち止まりました。

「どうしたの文夜？」

驚いた水奈は、手袋を左手に持ったまま慌てて足を止め、後ろに置いてきた彼氏を体ごと振り返りました。

文夜は精一杯に水奈の顔を見て言いました。

「水奈。実は俺、実家に帰ることになったんだ。」

突然の告白に、水奈は左手を開きました。桃色の手袋が、ガードレールの根本めがけて落ちていきます。

「なんでいきなり？」

「父さんが倒れたんだ。俺が店を継がなきゃならない。」

文夜の実家は、この町から何十キロも離れた場所にある靴屋でした。

「そっか、じゃあ会いに行くよ。」

水奈はニコリと笑ってみせました。しかし心の中ではわかっていました。そんな遠くに行くための交通費など、大学生である自分の財布には無いということを。

文夜は最初、交通費を指摘しようとしました。しかし止めて、代

わりにこう言いました。

「ありがとう。でも、無理はするなよ。メールはなんとかできるかもしれないからさ。」

もちろん、メールだってしょっちゅうはできません。料金もかかりますし、文夜はこれから忙しくなるでしょうから。ただ、慰みになればと思って言ったのです。

水奈もそれを承知の上で、うなずきました。

「うん。そっちも無理はしないでね。さあ、とりあえず歩こう。日が暮れちゃうよ。」

「ああ、そうだな。」

手袋が落ちたことに全く気づいていない二人は、これからの遠距離生活を考えながら、不安を引き連れて駅へ向かったのでした。

<妄想終了>最後に

…ふう。まあ、こんな感じでしょうかね。設定とかは妄想しながら考えてしまいましたが。まあ、妄想ってそんなもんですよね。

ん？あなたは誰かって？ハムリンですよ。ずっと話していたじゃありませんか。

まあそれはさておき、皆さん。わたしの妄想はどうでしたか。ところどころおかしな点もありましたでしょうね。

とりあえず、話の内容さえわかってくれればそれで十分です。

以上で私の話を終わりますが、みなさんもぜひ、手袋に妄想を膨らませてはいかがでしょうか。

<妄想終了>最後に（後書き）

～あとがき～

どうも、林羽夢です。
初投稿でこれとは…なかなかひどいものですね。
細かい設定は何にも考えずに書いた結果がこれです。ちゃんと決めておけば良かった…↑もう遅いぞ

まあ、なにはともあれ、完結しましたよ～
こんな駄文を最後まで読んでくれた貴方、話してくれたハムリンに、心からの感謝です！

次は、高校の部誌に載せたやつを出すつもりです。まだまだ成長する予定なので、飽きずに読んでくれる、優しい人がいることを望みます。

ではまた／（＾ω＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6996z/

落ちてる手袋を見ると

2011年12月25日17時47分発行